

夢物語 2

2006年夏に見た夢の記録である。

大阪湾南部に位置する小さな博物館の事務室を訪れると、10数人の外国人の若者でひしめいていた。聞くと、みんな海洋生物学の研究者だという。アジアから、欧米から、アメリカからと、世界中から若き研究者たちが集まったのである。なぜ集まったのかというと、博物館に勤務するYさんの調査によって、館に隣接する^{に、よいろはま}二字色浜に生息する生物の90%以上が二字色浜固有種であることが判明したからだ。それで、二字色浜を徹底的に調査するために世界中から研究者が集まってきたのである。

調査隊は海水温が下がるまでの2ヶ月間、調査船で共同生活をしながら調査を行うという。二字色浜は、浜というだけあって海岸線に沿った海域なのだが、陸に上がっている時間をもたないというので調査船をあつらえたのだ。調査船が必要なもうひとつの理由は、重量物を引き上げる作業があるからである。重量物というのは巨大クジラの骨で、二字色浜の深みには、かなりの数のクジラの骨が沈んでいるのだそうだ。調査隊が引き上げたクジラの骨を組み立てて、巨大な骨格標本を作るんだと、ホネ屋のNさんが興奮ぎみに語っている。

二字色浜は遠浅の砂浜である。いったいどこにそんな深みがあるというのだろう。そもそも巨大クジラなど生息できそうもない二字色浜に、なぜ巨大クジラの骨が沈んでいるのだろうか。巨大クジラの骨の話は、にわかには信じられなかった。

私は水深10数メートルの海中にいた。そこが二字色浜であることは、自明のことであった。水面を見上げると、細波がプリズムの役目を果たしているのか、自然界の水がもたらす現象を撮影しているTさんの写真のように虹色に輝いていた。二字色浜という名称は、もしかしたら水面の細波が起こす、この現象から来ているのではないかと思った。昔の人が海中から眺めた水面の鮮やかさを虹色に例えたのかもしれない。字は「二字」が当てられているが、本来の意味は「虹色浜」ではないだろうか。

水面を見上げながら想像をめぐらせている私の背後から、調査船が近づいてきたようだ。船の舳先が目に入った。木造船だろうか、船底は、何枚もの細長い板が船首から船尾に向けて平行に並べられ、打ち付けてあるように見えた。木造船にしてはかなり大きな船らしく、前進するに従い私の視界を覆っていった。

私は水中で静止しているつもりなのに、体がどんどん浮上して、調査船に接近していくように感じた。あまり近づきすぎるとスクリュウに巻き込まれるかもしれないと思い、潜水しようとするのだが、船底は私にどんどん近づいてくる。船底から2メートルほどまで近づいて初めて、それは船底ではなくてシロナガスクジラの腹だと気づいた。腹の縦ひだが、細長い板に見えていたのだ。私が浮上していたのではなくて、クジラが潜水してきた

のだ。私はクジラのほぼ真下にいたのだ。

クジラが前進するにつれてクジラの体の幅は細くなってきた。これはクジラの尾の部分
が近づいてきた証拠である。巨大なシロナガスクジラであっても、尾の付け根はそれなり
に細いのだ。そのため、阻まれていた視界が開けてきた。私は、真上から接近してきた1
頭のクジラしか意識していなかったが、クジラは1頭ではなかった。真上にいるクジラの
右側にも、そして左側にも、大きなクジラの姿が見えた。さらにその右側左側にも、さら
にその向こうにもクジラが見えた。シロナガスクジラの大群が背後からやってきたのだと
気づいたとたん、巨大なクジラの尾びれが私の目の前に打ち下ろされた。その反動で私の
体は浅瀬の方へ押し流された。激しい水圧を感じながらもクジラの群に目をやると、巨大
なクジラがまるでイワシの群のように一団となつて、暗い深みに姿を消して行くのが見え
た。間違いなく巨大クジラが二字色浜に生息しているのだ。

二字色浜の浅瀬は岩がごろごろ転がっていた。砂浜だけだと思っていたのにこんな岩浜
があるのは意外だった。岩の上を見回していると、キリギリスに似た生き物が止まってい
るのを見つけた。キリギリスには似ているが、明らかに海水中に生息している生き物で、
昆虫の一種ではなかった。節足動物であることは確からしいが、おそらく節足動物門に新
たな綱、たとえば海昆虫綱といったものを設けて分類すべき生き物であろう。

岩から生えた海草の上には、カマキリに似た海昆虫がいた。おそらくそのウミカマキリ
が餌にするのであろう蝶のような生き物が海草の間を縫うように飛んでいた。泳ぐという
表現は当たらない。まさに海中を飛翔するという表現がぴったりである。空中を飛翔する
蝶と同じ動作で羽ばたいているのだが、空中よりも粘度の高い海水中ではその動作は遅く、
まるで蝶の羽ばたきをスローモーションで見ているようだ。

これらの生き物が、Yさんの発見した二字色浜固有種の一部なのだろう。10年以上も二
字色浜を調査してきたYさんだからこそ成し得た発見だろうが、これはかなりうらやまし
い発見である。今まで誰も見たこともない生き物がまだまだ見つかるのだと思うと、わく
わくしてくる。ぜひ、私もこの調査に参加したい。

私は調査船から二字色浜を眺めていた。二字色浜は大阪湾に収まりきれないぐらいの広
大な世界なのだ。私は海洋生物学の研究者ではないが、この、大阪湾のガラパゴスとでも
いうべき二字色浜の調査は魅力的である。頼み込めば、Yさんなら私を調査メンバーに加
えてくれるのではないだろうか。

このとき私は重大なことに気づいた。私にはスキューバダイビングの経験が無いこと
である。調査のほとんどは潜水しての作業になるだろうから、これは致命的である。Yさん
たち調査隊にダイビングを教わりながら調査に参加するとしたら、足手まといになるに違
いない。そもそも私は高血圧症である。そんな私が日に何度も、海底と調査船の間を行き
来して、水圧を受けたり水圧から解放されたりを繰り返していたら、脳の血管が切れてし
まったりはしないだろうか。そんな事態になれば、私にとっても調査隊にとっても大打撃

である。

ふと、船室のドアに目をやると、ドアの脇に「血圧の高い人は海に入らないでください」と書いた紙が貼ってあるのが見えた。やっぱりそうだったのか、と私は納得した。そもそも、2ヶ月間も船の上で、しかも英語しか通じない、ライフスタイルも違う外国の人たちと共同生活をおくるなど、私には無理だ。残念だが、調査隊に参加することは諦めねばならない。

私は小さな博物館の事務室にいた。Yさんは調査隊のメンバーと英語で会話をしていた。Yさんは、ときどき私にも話しかけてくれるのだが、英語で話しかけてくるのだ。Yさんは調査隊のリーダーだから、他のメンバーの前で私にだけ日本語で話すわけにはいかないのは分かるのだが、なんだか寂しい気持ちがあった。